

袖ヶ浦市花和岱塚・文脇遺跡

——総合流域防災（松川河川改修）埋蔵文化財調査報告書——

平成20年2月

千葉県土整備部
財團法人 千葉県教育振興財団

袖ヶ浦市花和岱塚・文脇遺跡

——総合流域防災（松川河川改修）埋蔵文化財調査報告書——



序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第590集として、千葉県県土整備部の総合流域防災松川河川改修に伴って実施した袖ヶ浦市花和岱塚・文脇遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では弥生時代中期から後期の集落や近世の塚が調査され、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護と理解のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成20年2月

財団法人 千葉県教育振興財団
理事長 福島義弘

凡　例

1 本書は、千葉県県土整備部による総合流域防災松川河川改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2 本書に収録した遺跡は下記の遺跡である。

花和岱塚・文脇遺跡 千葉県袖ヶ浦市上泉字花和岱759-1ほか

遺跡コード 文脇遺跡229-036 花和岱塚229-037

文脇遺跡は昭和63年に一部調査が実施され、481-003（袖ヶ浦町文脇遺跡）の遺跡コードが付されたが平成13年の遺跡地図の改訂に伴い、上泉遺跡・上ノ台遺跡が文脇遺跡に統合されており新たに036の遺跡コードを付した。

3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財團が実施した。

4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。

5 本書の執筆・編集は、主席研究員 土屋治雄が担当した。

6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県県土整備部君津地域整備センター、袖ヶ浦市教育委員会の御指導を得た。発掘調査に当たっては隣接地主の福原保氏、泉長寺、地元上泉区向岱分区の御指導と御協力を得た。

7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図：袖ヶ浦市作成都市計画図

第3図：国土地理院発行1/25,000地形図「上総横田」「姉崎」

8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和47年撮影のものを使用した。

9 本書で使用した図面の方位はすべて座標北である。測量値は世界測地系である。

10 採図に使用したスクリーントーン及び記号の用例は次のとおりである。

遺構 炉 :

住居跡床面硬化部分 :

遺物 赤彩範囲 :

11 本書で使用した以降の略号は次の通りである。

S I : 竪穴住居跡 S K : 陷穴 S M : 塚 S D : 溝

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1 調査に至る経緯.....	1
2 発掘調査の方法と成果の概要.....	1
第2節 遺跡の位置と環境.....	3
1 遺跡の位置.....	3
2 周辺の遺跡.....	3
第2章 遺構と遺物.....	6
第1節 縄文時代.....	6
1 SK-001	6
2 出土遺物.....	6
第2節 弥生時代・古墳時代.....	8
1 竪穴住居跡.....	8
2 溝.....	10
3 その他の出土遺物.....	11
第3節 近世.....	17
1 塚.....	17
第3章 まとめ.....	21
報告書抄録.....	卷末

挿図目次

第1図 調査区周辺地形図.....	2	第8図 SI・SD出土遺物	12
第2図 遺構位置図・標準土層図.....	3	第9図 その他の出土遺物(1).....	13
第3図 周辺の遺跡分布図.....	5	第10図 その他の出土遺物(2).....	14
第4図 SK-001	6	第11図 その他の出土遺物(3).....	15
第5図 縄文時代出土遺物.....	7	第12図 その他の出土遺物(4).....	16
第6図 SI-002・003・004・005・006	9	第13図 SM-001	18
第7図 SI-001・SD-001	11	第14図 SM-001出土遺物	19

図版目次

- | | |
|--------------------|------------------|
| 図版1 遺跡周辺航空写真 | 図版6 SD-001土層断面 |
| 図版2 SK-001 | SM-001銅鏡出土状況 |
| SI-001柱穴 | SM-001(花和岱塚)調査前 |
| SI-001柱穴土層断面 | 図版7 SM-001表土除去後 |
| 図版3 SI-002 | SM-001土層断面 |
| SI-002土層断面 | 下層グリッド(2C-02) |
| SI-003 | 図版8 繩文時代出土遺物 |
| 図版4 SI-003土層断面 | 図版9 SI・SD出土遺物 |
| SI-003炉土層断面 | 図版10 その他の出土遺物(1) |
| SI-004 | 図版11 その他の出土遺物(2) |
| 図版5 SI-004柱穴遺物出土状況 | 図版12 その他の出土遺物(3) |
| SI-005 | 図版13 その他の出土遺物(4) |
| SI-006 | SM-001出土遺物 |

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査に至る経緯

小櫃川の支流である松川は、川幅が狭く曲流しているため大雨のたびに氾濫し周辺に多くの被害をもたらしてきた。そのため千葉県県土整備部は総合流域防災事業として松川河川改良工事を計画し千葉県教育委員会に事業地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」を照会した。千葉県教育委員会文化財課との間で協議の結果、事業計画変更は困難であり、事業予定地内に所在する埋蔵文化財については発掘調査による記録保存の措置を講ずることになった。調査は財団法人千葉県教育振興財團に委託され、河川改良工事に先行して花和岱塚・文駒遺跡の発掘調査が実施された。

発掘調査と整理作業の期間と内容は以下の通りである。

(1) 発掘調査

期間 平成 19 年 7 月 2 日～平成 19 年 8 月 31 日

組織 調査研究部長 矢戸三男

南部調査事務所長 西川博孝 調査担当者 上席研究員 小林信一

内容 対象面積 塚 1 基・315m²

確認調査 上層 57m² 下層 12m²

本調査 上層 塚 1 基・176m² 下層 0 m²

(2) 整理作業

期間 平成 19 年 9 月 3 日～平成 19 年 10 月 31 日

整理担当者 主席研究員 土屋治雄

内容 記録整理から報告書印刷・刊行まで

2 調査の方法と成果の概要（第2図）

調査区は東西方向に長い東西約 30m、南北約 13m の範囲であった。調査に先立ち国土地理院の国家座標を基準に、調査対象範囲を包括するようにグリッド設定を行った。設定に当たっては 20m × 20m の方眼を大グリッドとして、X = -65,520, Y = 18,850 を起点とし北から南へ 1, 2 と付け、西から東へ A, B, C と付した。更に大グリッド内を 2m × 2m の小グリッドに 100 分割した。

調査の対象は塚 1 基と塚周囲及び塚下の上層調査ならびに下層の調査であった。

調査は塚から開始した。測量会社に委託し塚の等高線測量を実施した。のち土層堆積状況把握のため十字の土層観察ベルトを残し表土の除去を行った。当初古墳と認識していたが、調査過程で表土中や盛土中から少量ながら近世の遺物が出土したことから塚と認定し、袖ヶ浦市教育委員会の命名により花和岱塚と呼称することとした。周溝は確認されなかった。重要遺物については 1 点ごとに図面に位置を落とし、標高を測定した。一括遺物については土層観察ベルトを境に北東側から時計回りに 1 区～4 区とし、上層から表土、表土下層、盛土上層、盛土下層に分けて取り上げたが、盛土中からは近世の遺物とともに弥生土器が多く出土した。調査の各段階において図面作成、写真撮影を行った。

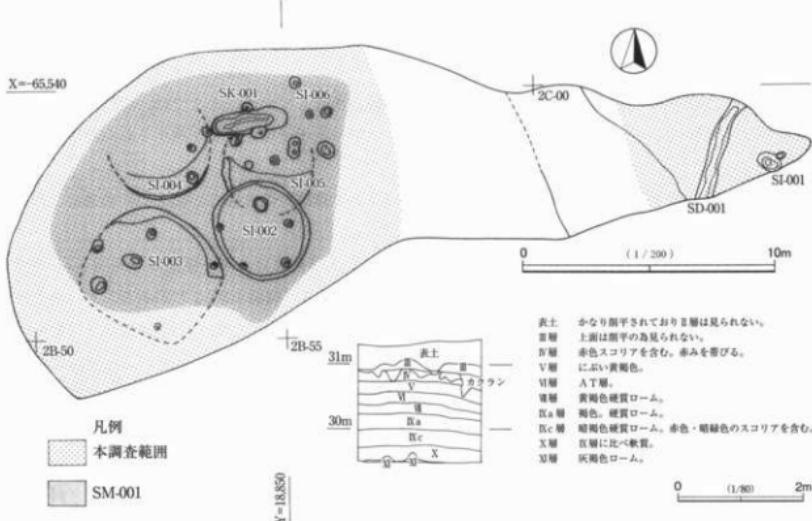
塚の調査終了後、ローム層上面まで掘り下げて造構確認を行った。その結果住居跡の存在が確認された

ため本調査を実施し、弥生時代中期から後期の住居跡5軒と縄文時代の陥穴1基を発掘した。また調査区東側（A区）では住居柱穴2基、溝1条を発掘した。各遺構の調査は、埋没状況の把握のため土層観察ベルトを残して発掘を行い、土層セクション図を作成後完掘し、のち平板測量により平面図を作成した。また必要に応じて遺物出土状況図の作成も行った。作図終了前後には遺物出土状況写真や遺構完掘状況写真の撮影を行った。

上層本調査終了後、旧石器時代の遺構、遺物の分布状況を把握するため $2m \times 2m$ のグリッドを3か所設定し下層確認調査を実施した。下層については遺構、遺物が検出されなかったため確認調査のみで終了した。



第1図 調査区周辺地形図



第2図 遺構位置図・標準土層図

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置（第1図、図版1）

花和岱塚・文脇遺跡の所在する袖ヶ浦市は、房総半島のほぼ中央部の東京湾岸に位置し、北部から東部は市原市、東部から南部は木更津市に接する。袖ヶ浦市の地形は、北部から南東部の台地と中央部から南部の沖積地とに大きく分けられる。台地部分は下総台地の南縁部に当たり、標高30m～50mである。北を養老川に、南を小櫃川によって分断された袖ヶ浦市の台地は袖ヶ浦台地と呼ばれている。この平坦な台地上には大規模な遺跡が多数確認されている。小櫃川は、君津市南端部の清澄山系を水源とし房総丘陵を複雑に開析しながら北流し木更津市域を経て西に流れを変えながら袖ヶ浦市を流れ下流域に広大な沖積地を形成し、河口部で再び木更津市に入り東京湾に注ぐ県内有数の河川で流路延長88kmである。小櫃川低地内では、蛇行する小櫃川に伴って発達した自然堤防などの微高地上に遺跡が確認されている。

花和岱塚・文脇遺跡は袖ヶ浦台地の西側縁辺部に位置し、西側を小櫃川に、北側を支流松川に開析された低地に面している。今回の調査地は文脇遺跡の北端に位置し、北側の崖下を松川が流れる標高30m前後の緩斜面上に立地している。

2 周辺の遺跡（第3図）

花和岱塚・文脇遺跡（第3図1）の周辺は遺跡の密集する地域として、早くから注目されてきた地域である。文脇遺跡は東西約1.4km、南北約0.9kmの広さを持ち、遺跡内には他に塚2基が所在している。昭和63年に発掘調査が行われ弥生時代後期から古墳時代前期の密集した集落や方形周溝墓が検出され、小

銅鐸が出土している¹⁾。出土地点は今回の調査区から南東に700m～800mに位置する。この小銅鐸及び伴出遺物は千葉県有形文化財の指定を受けている。また隣接地は君津都市文化財センターによる調査が行なわれ弥生時代の密集した集落が検出された²⁾。

遺跡周辺にも弥生時代から古墳時代にかけて多くの遺跡が所在している。ここでは、周辺に所在する遺跡のうち、発掘調査によって内容が明らかになっており、同時期の遺構・遺物が検出された遺跡について概観する。

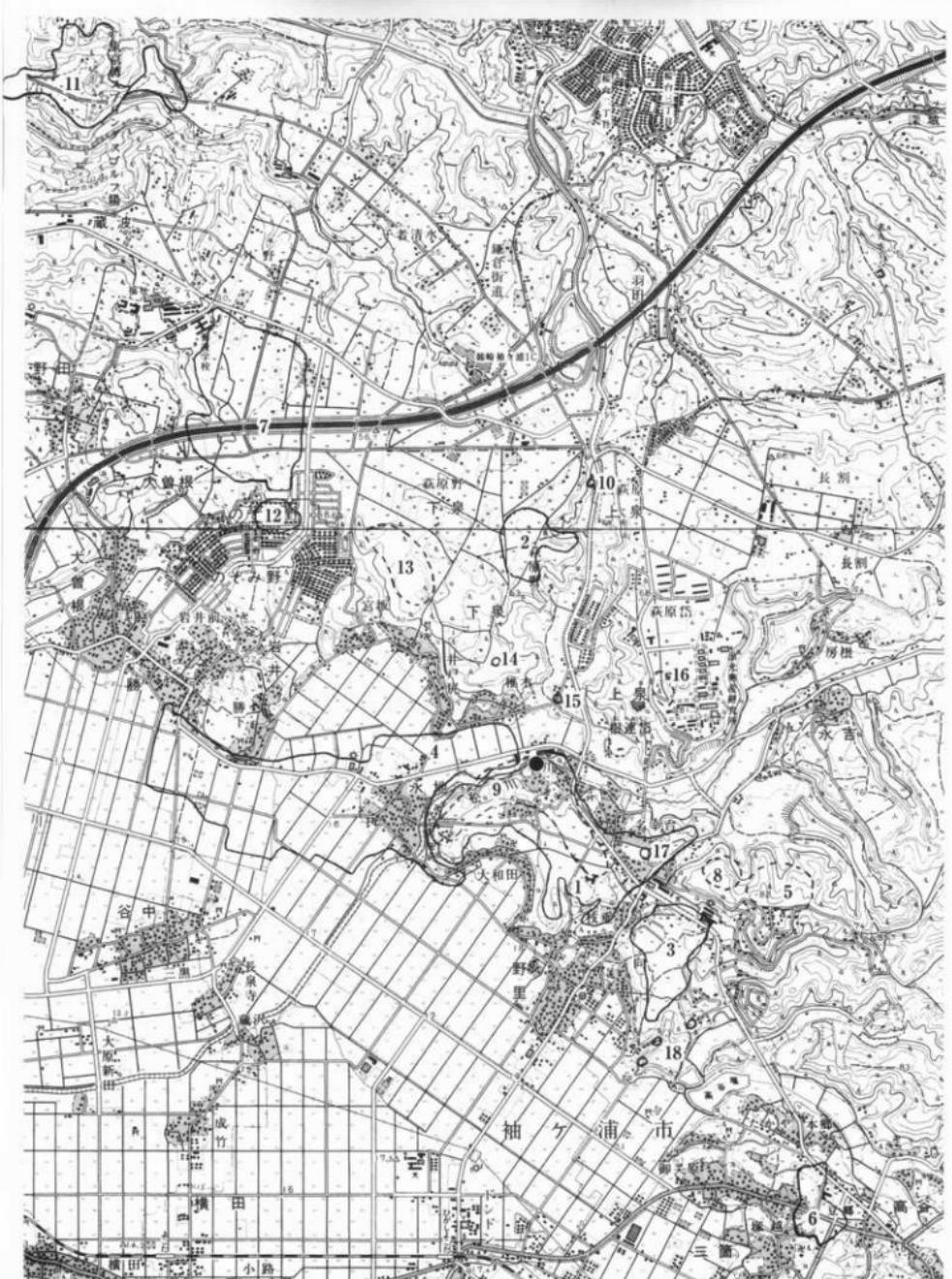
弥生時代中期から後期の遺構が検出されている遺跡は荒久(2)遺跡（第3図6）、庵ノ口向台遺跡³⁾がある。庵ノ口向台遺跡では中期後半の住居跡が10軒検出されている。

弥生時代から古墳時代前期にかけての集落が調査されている遺跡には、東上泉遺跡（同図3）、西原遺跡（同図4）、上大城遺跡⁴⁾、美生遺跡⁵⁾（同図11）、山王辺田遺跡（同図12）などがある。東上泉遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期に比定される住居跡が66軒検出されている。上大城遺跡で弥生時代から古墳時代前期の竪穴住居跡67軒、方形周溝墓6基、美生遺跡群でも弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡が400軒前後、古墳時代後期の竪穴住居跡が20軒以上検出された。山王辺田遺跡群は弥生時代後期から古墳時代前期の大集落である。荒久(1)遺跡⁶⁾では方形周溝墓12基が検出されており、土坑墓から銅鏡やガラス小玉が出土している。

今回の調査では古墳は検出されなかったが周辺には古墳群も確認されている。寒沢古墳群（同図5）、愛宕古墳群（同図8）、上泉古墳群（同図9）、大塚古墳群（同図13）が所在する。上泉古墳群には円墳15基、愛宕古墳群には円墳8基、方墳2基、寒沢古墳群には円墳12基、方墳4基、大塚古墳群には前方後円墳1基、円墳12基が現存している。

塚は本遺跡に3基、打越岱（同図16）に2基、日ノ台（同図18）に3基のほか関尻塚（同図15）、西萩原塚（同図10）、下山台塚（同図17）、椎木塚（同図14）などが所在している。

- 注1 〔助〕千葉県文化財センター 1995 「袖ヶ浦市文臨遺跡」
2 〔助〕君津都市文化財センター 1992 「千葉県袖ヶ浦市文臨遺跡」
3 〔助〕千葉県文化財センター 1993 「庵ノ口向台遺跡・大作古墳群」
4 〔助〕君津都市文化財センター 1994 「千葉県袖ヶ浦市上大城遺跡発掘調査報告書」
5 〔助〕君津都市文化財センター 1998 「千葉県袖ヶ浦市美生遺跡群Ⅳ 第2地点」
6 〔助〕千葉県文化財センター 1999 「袖ヶ浦市荒久(1)遺跡・三箇遺跡」



1 文脇遺跡 2 神野台遺跡 3 東上泉遺跡 4 西原遺跡 5 寒沢古墳群
 7 台山遺跡 8 愛宕古墳群 9 上泉古墳群 10 西萩原塚 11 美生遺跡
 13 大塚古墳群 14 椎木塚 15 間尻塚 16 打越岱塚群 17 下山台塚
 18 日ノ台塚

● 調査地点

第3図 周辺の遺跡分布図

第2章 遺構と遺物

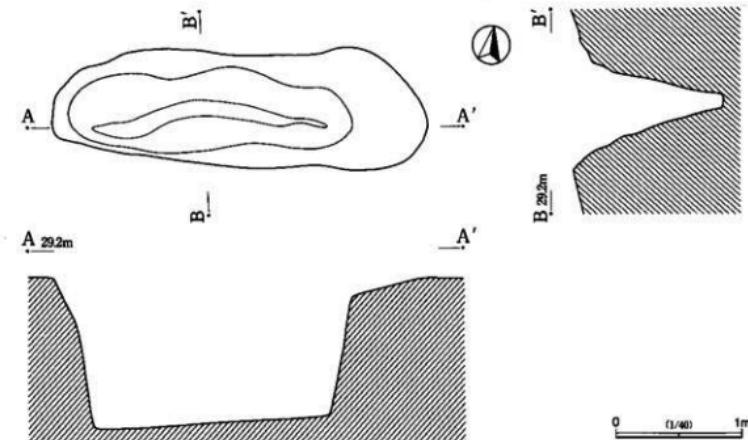
第1節 繩文時代

概要

文脇遺跡で検出された縄文時代の遺構は陥穴1基、遺物は縄文土器、石斧、剥片が少量出土した。

1 SK-001 (第4図、図版2)

調査区西側2B-04付近から検出された陥穴である。長さ3.0m、幅0.9m、深さ1.2mで、平面形は東西方向に長い長楕円形である。断面形はV字型で底面の幅約12cm。覆土は暗褐色土、暗黄褐色土主体で下層の土はしまりがない。遺物は出土していない。北側は数mで松川の崖面となる。

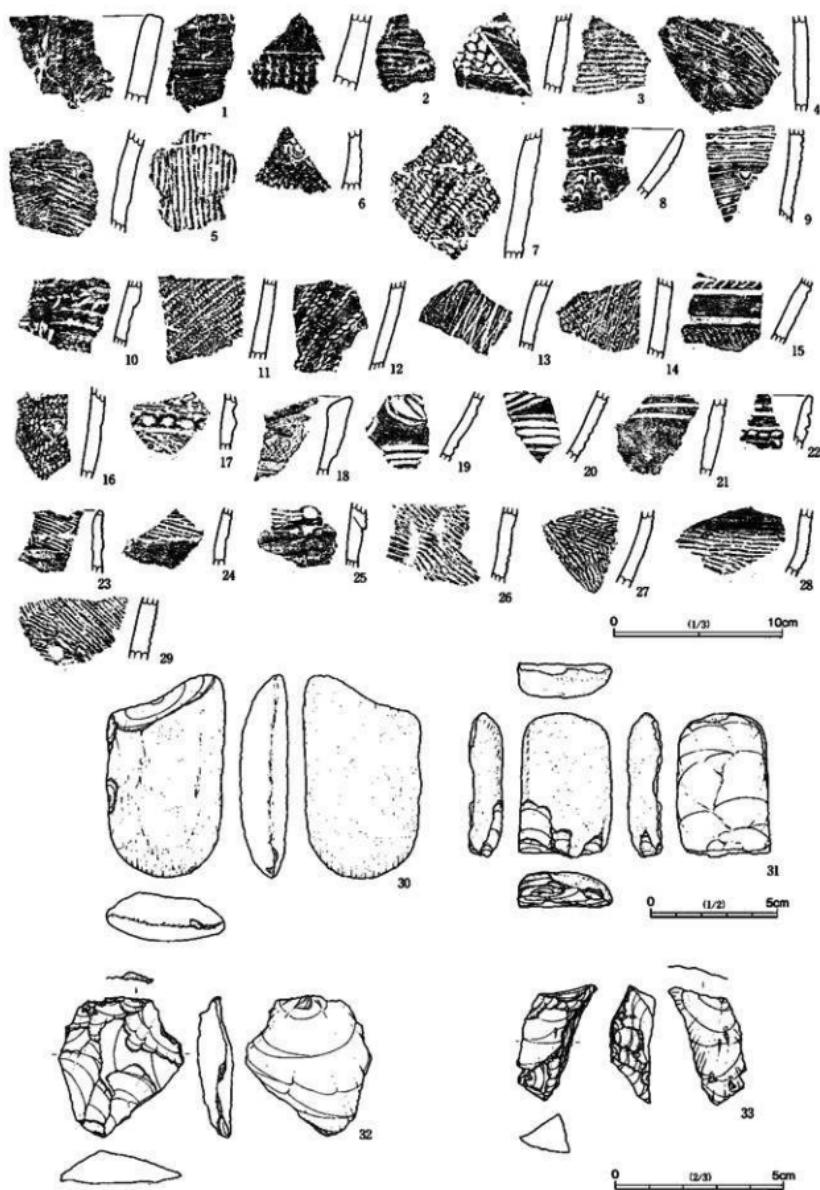


第4図 SK-001

2 出土遺物 (第5図、図版8)

縄文土器・石器

塚の封土中を主体として早期から晩期にわたる縄文土器が出土した。1・2は子母口式で、1は無文、2は貝殻文と沈線が施される。他に刺突列が2段施された口縁部小破片が1点ある。3は鶴ヶ島台式である。4・5は貝殻条痕が施されたもので、他に小破片が8点ある。6は前期間山式で、コンバス文が施される。7は黒浜式と思われ、結節を伴うL Rが施される。同時期と思われる小破片は他に6点ある。9～14は前期後半に属するもので、10には刺突文と変形爪形文が施される。同時期の小破片は他に6点ある。14～17は後期の土器で、14は塚之内1式、15～17は加曾利B式である。同時期の小破片は他に12点ある。18は晩期前浦式である。19～29は晩期終末に属するもので全部で59点あり、量的に最もまとまっている。19・20は浮線文、21は沈線文、22は沈線と刺突文が施されたものである。23以下は撲糸文が施された粗製土器で、23～25は折り返し口縁を持つ破片である。30はホルンフェルス製で刃部に摩耗痕のある打製石斧、31は砂岩製で板状の半削礫の一端に刃部加工を始めた打製石斧の未製品である。32はチャート製の剥片で、右下側縁に使用痕がある。33は黒曜石製の断面三角形の剥片である。



第5図 繩文時代出土遺物

第2節 弥生時代・古墳時代

概要

竪穴住居跡 6軒と溝 1条が検出された。調査区西側から 5軒、東側から 1軒である。SI-002～SI-006 は塚の盛土下から検出された。塚築造時の削平や後生の擾乱によりかなりの部分を失っている。塚の盛土中からは弥生土器が多く出土した。古墳時代の遺構は検出されず、土師器片 1点が出土している。

1 竪穴住居跡

SI-001と出土遺物（第7・8図、図版2・9）

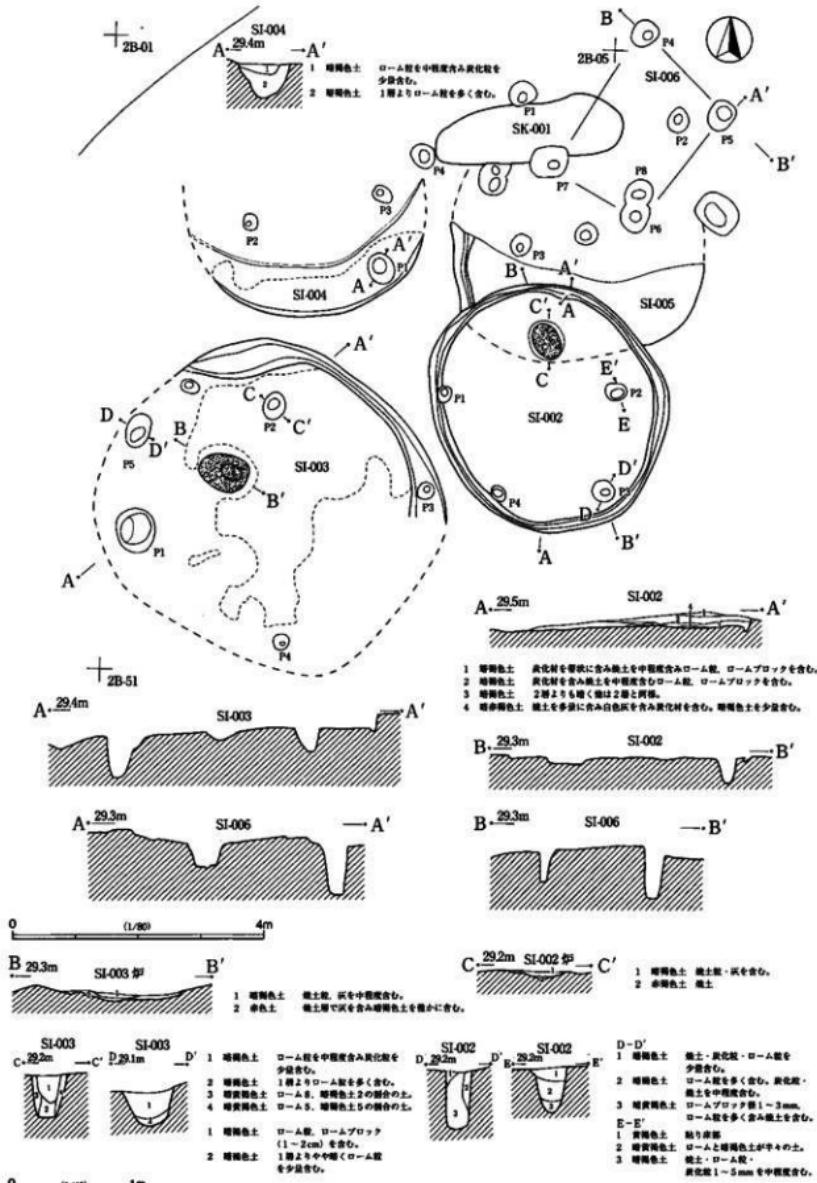
調査区東端 2C-14 グリッドにおいて 2基の柱穴を検出した。柱穴内から弥生土器が出土したこともあり竪穴住居跡の柱穴の可能性が高く住居跡とした。柱穴 B を壊して柱穴 A が造られる。柱穴の覆土は暗褐色土、暗黄褐色土で自然堆積と思われる。住居自体は削平を受けたものと思われ検出されなかった。また周囲には本柱穴以外柱穴は検出されていない為、他の柱穴は調査区外になると思われる。主軸、規模は不明である。

遺物 1、2 は底部、3 は胴部片である。1 は柱穴 B、3 は柱穴 A から出土した弥生土器である。1 は復元底径 7.0cm を計る。火熱を受け表面が荒れており底面にススが付着している。2 は復元底径 7.4cm を計る。内面にススが付着する。3 は壺と思われ、沈線区画内に細かい繩文を施す。色調は灰白色である。

SI-002と出土遺物（第6・8図、図版3・9）

調査区西側 2B-24 付近から検出された住居跡である。今回の調査で唯一全体が明らかな住居跡である。主軸を南北からやや西に振る。平面形は長径 4.0m、短径 3.47m の梢円形を呈する。確認面からの掘込みの深さは 23cm ほどである。炉の南側に 1.3m × 0.6m、最大厚 5cm ほどの焼土の堆積がみられた。削平を受けているため覆土の遺存はよくないが暗褐色土主体で 1、2 層には炭化材や焼土が含まれる。最下層は焼土、白色灰、炭化材を含み住居の焼失も考えられる。柱穴は 4 基あり、3 基は住居西側及び南側の壁際にある。柱穴の深さは P1-19cm、P2-49cm、P3-37cm、P4-14cm である。炉は北側中央よりやや東にずれた位置にある。床面はほぼ全面が硬化している。壁周溝は全周している。塚築造による削平のため遺物の出土は少ない。

遺物 4 は炉内出土の土器と塚(SM-001) 2 区表土下層出土土器が接合した壺である。胴上部から胴下部が遺存する。残存器高 18.0cm を計る。胴上部を結節文と沈線で区画しその間に羽状繩文を配し、その下の櫛齒文内に繩文を施し文様部以外を赤彩している。調整は内外面ミガキで調整し胎土は砂粒、褐色粒、雲母を含み焼成は良好。色調は内外面橙色を呈する。5 は口縁部に羽状繩文を施す。器壁が薄い。6～11 は底部片である。6 は壺の底部と思われる。炉内から出土した。底部 40% ほどが遺存し復元底径 7.2cm を計る。外面ハケ、内面ヘラナデで仕上げている。胎土は混入物が少なく雲母、白色針状物質を若干含み焼成は良好。色調は内面明赤褐色、外面にぶい黄橙色で一部橙色を呈す。2 次焼成を受け器面が荒れている。7 は復元底径 6.4cm を計る。底部外縁を面取りしている。8 は復元底径 8.0cm を計る。壺と思われ内外面に赤彩痕を残す。9 は復元底径 5.0cm を計る。底面にススが付着する。10 は復元底径 4.8cm を計る。11 は小型土器で底部の 1/4 が遺存し復元底径 4.2cm を計る。外面ミガキ、内面ヘラナデ、底部ヘラケズリで仕上げている。胎土は密で細砂粒を含み焼成は良好。内面にはススが付着し外面は明赤褐色から灰黄褐色を呈す。12～16 は口縁部である。12 は折り返し口縁の壺と思われ口唇部、口縁部に細かい繩文、折り返し端部に刻みを施している。13、14 は口唇部にヘラ状工具による押圧を施した壺である。15 は折り返し口縁である。16 は折り返し端部に刻みを施す。17、18 は胴部の破片である。17 は波状文を施している。



第6図 SI-002・003・004・005・006

SI-003と出土遺物（第6・8図、図版3・4・9）

SI-002の西に位置する。住居西側と南東側が擾乱を受けている。検出できたのは炉、北側の壁と一部の床硬化面である。壁際には周溝が認められた。主軸は西北西を向く。炉は西側中央付近にあり長径は約95cmである。柱穴は6基検出された。深さはP1-63cm、P2-38cm、P3-32cm、P4-35cm、P5-36cmを測る。P1～P4が主柱穴であろう。南側が大きく擾乱を受けていたため断定できないが6本柱であった可能性も考えられる。覆土は暗褐色土が主体である。

塚築造時の削平のため遺物の出土は少ない。掲載した遺物は一括取り上げ遺物である。遺物19は口縁部、20、21は胴部である。19は折り返し口縁で口唇部、口縁部に繩文、折り返し部に刻みを施す。

SI-004と出土遺物（第6・8図、図版4・5・9）

調査区西側2B-12付近から検出された住居跡である。塚築造時の削平を受けていたため住居の大半を失っている。検出できたのは南壁の一部と床硬化面と柱穴である。検出できた範囲では、ほぼ全面から硬化した床面が検出された。平面形は楕円形と推定される。柱穴は3基検出された。深さはP1-30cm、P2-30cm、P3-31cmを測る。P1底面から土器が出土している。主軸、規模は不明である。

遺物22はP1から出土した器台である。底径6.2cm、残存高6.9cmを計る。外面ヘラケズリ後ミガキ、内面横方向のヘラミガキで仕上げている。胎土は砂粒、褐色粒、雲母を含む。内面は火熱を受け赤褐色を呈し、外側も2次焼成を受け暗赤褐色を呈し器面が荒れており数条の亀裂が見られる。23は胴上部の破片と思われる。他にもピット内から土器が出土したが小片で掲載できなかった。

SI-005と出土遺物（第6・8図、図版5・9）

調査区西側2B-14付近から検出された住居跡である。塚築造時の削平とSI-002との重複のため住居の大半を失っている。検出できたのは南東壁、南西壁の一部と壁周溝の一部および柱穴と床面の一部である。検出できた範囲の床面は全面が硬化している。平面形は小判形と推定される。P1、P2、P3が主柱穴の可能性が高い。深さはP1-56cm、P2-59cm、P3-40cmを測る。他の主柱穴は不明である。

遺物24は壺である。ピット内出土の土器片と塚（SM-001）2区表土下層出土の土器が接合した。頸部が約3/4遺存する。残存高7.1cmを計る。内外面ともナデで仕上げている。胎土は砂粒、雲母、白色針状物質を含み焼成は良好。色調は内面褐色、外側橙色から褐色を呈す。外側と内面上部を赤彩している。外側は無文である。25は底部である。26は口唇部に繩文を施す。

SI-006と出土遺物（第6・8図、図版5・9）

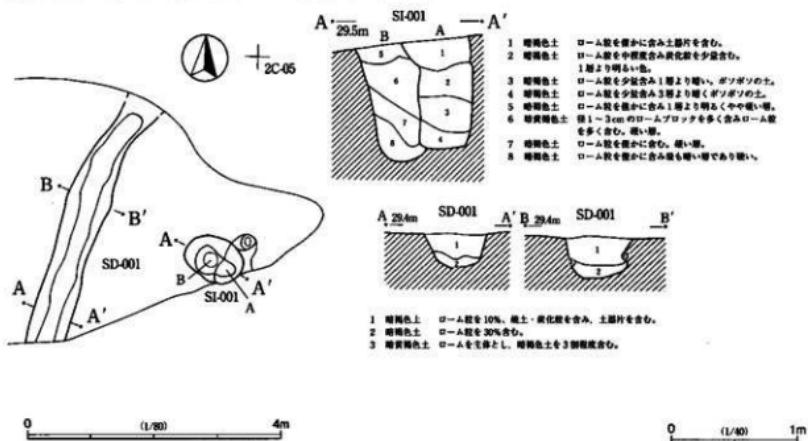
調査区西側2B-05付近から検出された住居跡である。削平を受けており検出できたのは柱穴5基である。P4～P7が主柱穴と思われる。柱穴の深さはP4-53cm、P5-80cm、P6-38cm、P7-88cm、P8-43cmを測る。P8は補助的な柱と思われる。ピット内から土器が出土したが、小片で掲載できた遺物は27の胴部破片1点のみであった。

2 溝

SD-001と出土遺物（第7・8図、図版6・9）

調査区東側2C-03～23にかけて約4m検出された。方向は北北東～南南西で、幅は0.7m、深さ33cm、断面形は逆台形で直線状に掘られ北端が収束している。覆土は暗褐色土と暗黃褐色土であり1層に焼土・炭化粒を含む。遺物の出土は少ない。28は一括取り上げされた弥生土器の底部である。復元底径7.0cmを計る。胎土に砂粒、白色粒、石英粒を含み、外側ヘラケズリ、内側ヘラナデ、底部ヘラケズリ調整され

焼成は良好である。色調は内面にぶい黄褐色、外面黄褐色を呈す。

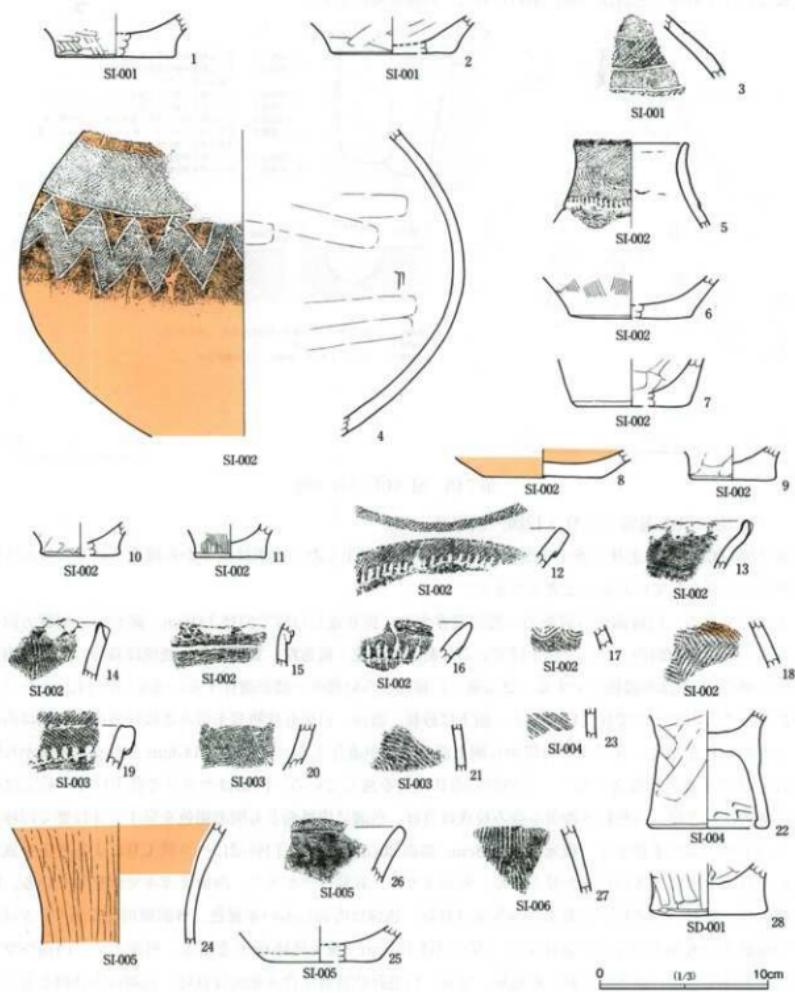


第7図 SI-001・SD-001

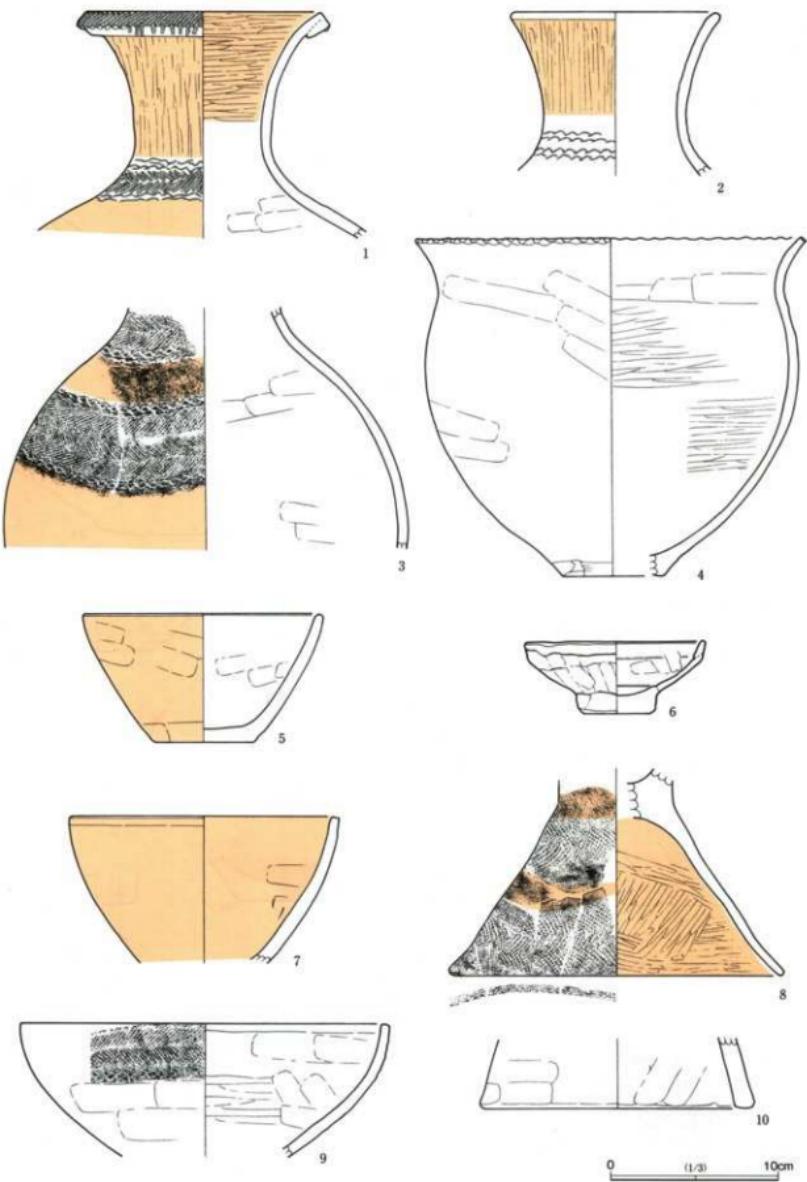
3 その他の出土遺物（第9～12図、図版9～12）

塚（SM-001）の表土及び盛土中から弥生土器が多く出土した。本来は塚下から検出された5軒の住居跡覆土中に存在していたものと考えてよい。

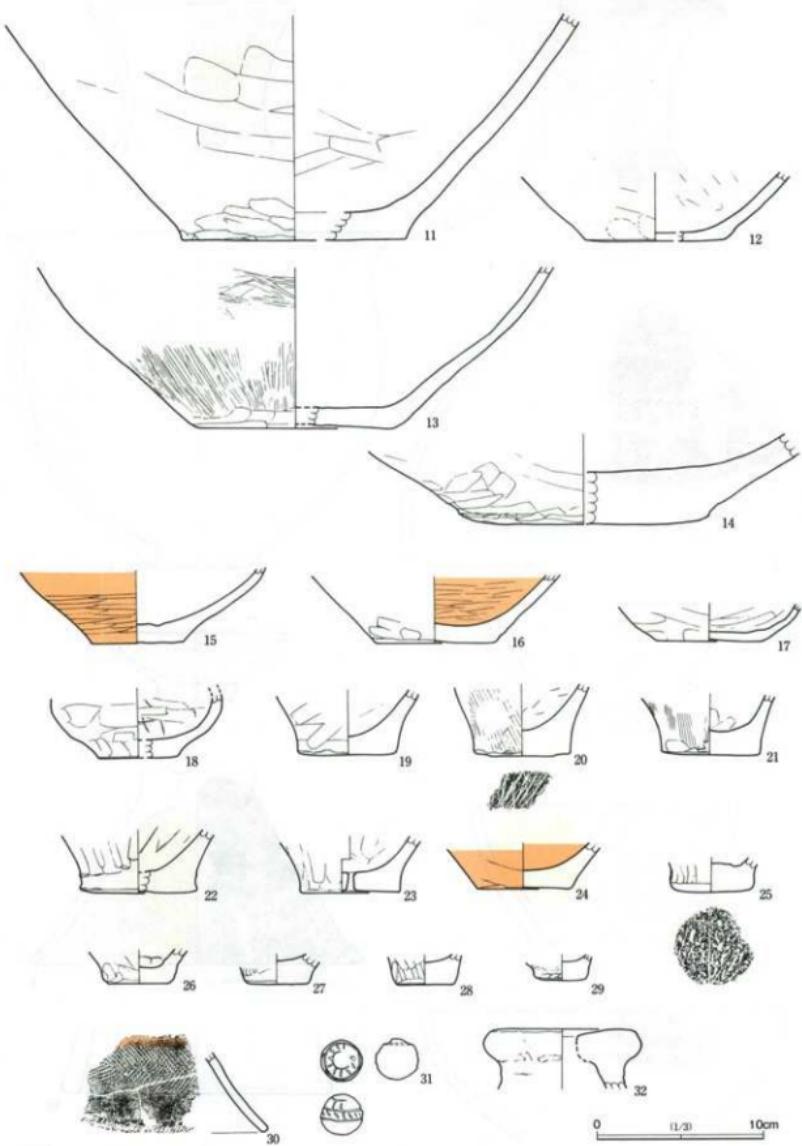
1は壺である。口縁部から肩部の一部が遺存する。折り返し口縁で口径14.0cm、調整は外面縦方向のミガキ、内面横方向のミガキで仕上げている。胎土は砂粒、褐色粒、雲母を含み焼成は良好。色調は内面にぶい褐色、外面は赤褐色を呈する。2は壺で口縁部から肩部の一部が遺存する。復元口径11.2cmを計る。外面ミガキ、内面ナデで仕上げている。胎土は砂粒、雲母、白色針状物質を含み焼成は良好。色調は内外面とも赤褐色を呈す。3は壺で肩部から胴上部の一部が遺存する。残存器高14.3cmを計る。頸部から胴部にかけて4条の結節文を配し、その間に羽状繩文を施している。内面はケズリで仕上げる。胎土は砂粒、褐色粒、雲母、白色針状物質を含み焼成は良好。色調は内外面とも明赤褐色を呈す。4は壺で口縁部から肩部の一部が遺存する。復元口径22.8cm、器高20cmを計る。口唇部にヘラ状工具による押圧を施す。外面のほぼ全面にススの付着が見られる。外面ミガキ、底部ヘラケズリ。内面ミガキで調整している。胎土は砂粒、雲母、白色針状物質を含み焼成は良好。色調は内面にぶい赤褐色、外面暗褐色を呈す。5は鉢で口縁部から底部の約3/4が遺存する。復元口径13.9cm、復元底径6cmを計る。外面ナデ、内面ヘラナデで仕上げている。胎土は砂粒、褐色粒、雲母、白色針状物質を含み焼成は良好。色調は内外面ともぶい赤褐色を呈す。6は手づくね土器の椀と思われる。口縁部から底部の1/2が遺存する。内外面に輪積み痕を残し高台底部外縁を一部面取りする。口径10.4cm、底径3.9cm、器高4.2cmを計る。外面ヘラケズリ、口縁部ナデ、内面ヘラミガキで仕上げている。胎土は砂粒、褐色粒、雲母を含み焼成はやや甘い。色調は内外面とも橙褐色を呈す。7は鉢で口縁部から胴下部の一部が遺存する。復元口径15.5cm、残存器高8.7cmを計る。外面ミガキ、口唇部ヨコナデ、内面横方向のミガキで仕上げている。胎土は砂粒、褐色粒、雲母を含み焼成は良好。色調は内外面とも明赤褐色を呈す。8は高杯の脚部



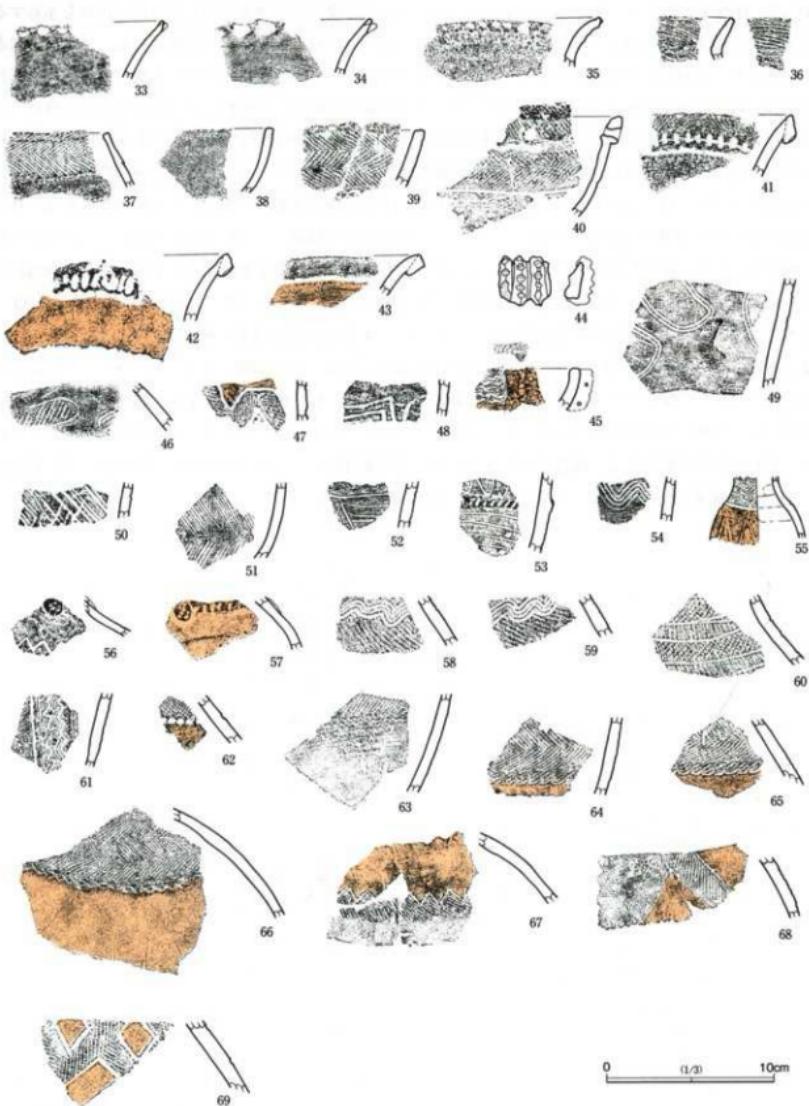
第8図 SI・SD出土遺物



第9図 その他の出土遺物(1)

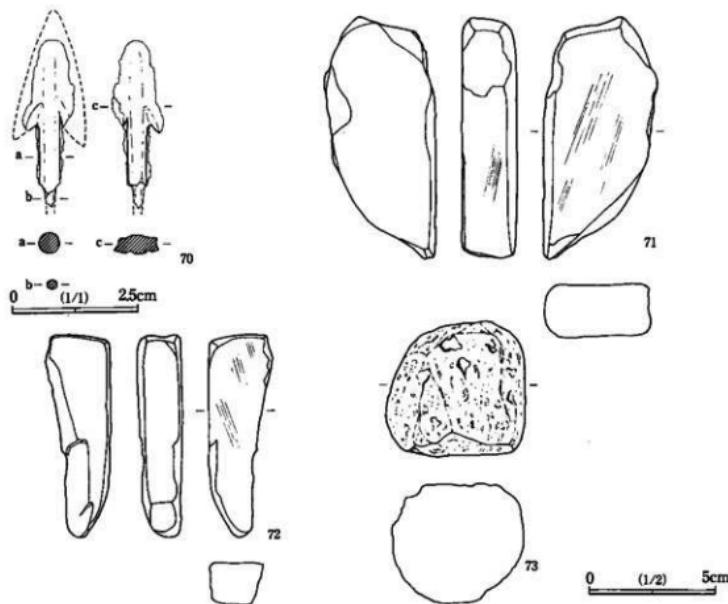


第10図 その他の出土遺物(2)



第11図 その他の出土遺物(3)

である。坏部を欠損する。復元底径 19.4cm を計る。外面に 2段の羽状繩文を配しその間と内面を赤彩する。底部下面に繩文を施し内面へラナデで仕上げている。胎土は砂粒、雲母を含み焼成は良好。色調は内面赤から赤黒色、外面にぶい赤褐色を呈す。9は高坏と思われる。口縁から胴部の 1/4 が遺存する。復元口径 22.0cm、残存器高 7.9cm を計る。内外面ミガキで仕上げ胎土は砂粒、黑色粒、雲母を含み焼成は良好。内外面に赤彩が施され色調は内外面とも明赤褐色を呈す。10は器台の脚部である。約 1/3 が遺存する。復元口径 15.2cm を計る。外面横方向のミガキ、内面縱方向のミガキで仕上げている。色調は内面にぶい褐色、外面橙色を呈す。11～29は壺、壺、鉢の底部である。20は底部に葉脈状の痕跡、25には木葉痕が見られる。23は底部中央を穿孔している。29はミニチュア土器の底部と思われる。31、32は土製品で、31はやや横長の球形で上部に紐通しの穴が貫通している。上部から中段にかけて 3 条の沈線が全周し沈線区画内に刻み目を入れている。上から見ると人の顔を模したかのようにも見える。33～45は口縁部である。33～35は口唇部にヘラ状工具による押圧が施される。39～41は口唇部に繩文を施す。42～43は折り返し口縁である。44、45は棒状浮文が付く。46～69は胴部片である。70は銅鏡である。SM-001 の 2 区盛土下層から出土した。塙下の住居に帰属していたものと思われる。長三角形の巻身をもち幅広い縞が特徴的である。深い逆刺は左右非対称で周縁が著しく損傷しており逆刺の一部と茎を除いて本来の形状を失っている。茎尻の表面も剥離する。残存する長さ 32.7mm、刃部幅 10.7mm、茎長 16.2mm～18.0mm、茎径 3.9mm～4.0mm、重量 2.41g を計る。71、72は砾石、73は軽石である。



第12図 その他の出土遺物(4)

第3節 近世

1 塚

SM-001（花和岱塚）と出土遺物（第13・14図、図版7・13）

調査区西側2Bグリッドに位置する。規模は東西12m、南北9.5m、高さ2mである。平面形は現状椭円形のように見えるが北側及び東側が直線状を呈しており、西側に大きく崩落したと想定すると平面形は正方形だった可能性も考えられる。ハードローム層を掘り下げて築造面としているが、塚中心部は高く縁辺部はより深く掘り下げられていた。調査区の全域で暗褐色土及びソフトローム層の堆積が認められなかつたことから、周辺一帯を削平した上で盛土を行ったのであろう。周溝は確認されなかつたことから、周辺一帯を削平した上で盛土を行つたのであろう。周溝は確認されなかつたことから、周辺一帯を削平した上で盛土を行つたのであろう。

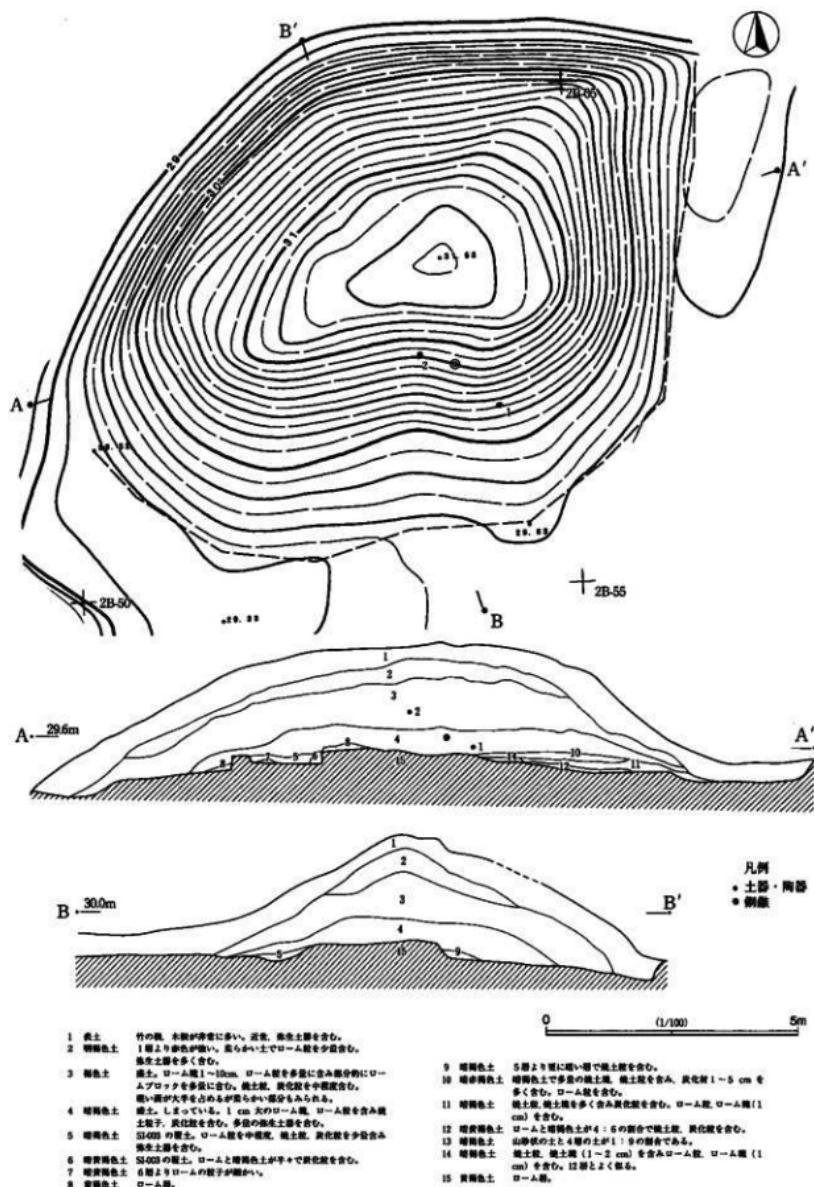
塚に伴うと思われる遺物は表土（1層）から盛土（4層）にかけて出土している。遺物は東西及び南北の土層観察ベルトを境に北東側から時計回りに1区～4区とし、上層から表土、表土下層、盛土上層、盛土下層に分けて取り上げた。

1は塚南側2区の盛土下層（4層）から出土したほぼ完形の瓦質の植木鉢である。口径13.0cm、底径8.1cm、器高6.6cmを計る。底部中央を穿孔しており孔径は0.7cmである。内部にアサリの左右殻がそろつた1個体分と巻貝（種不明）片1個が認められていた。内外面とも暗灰色を呈す。19世紀前半の江戸近郊産のものである。

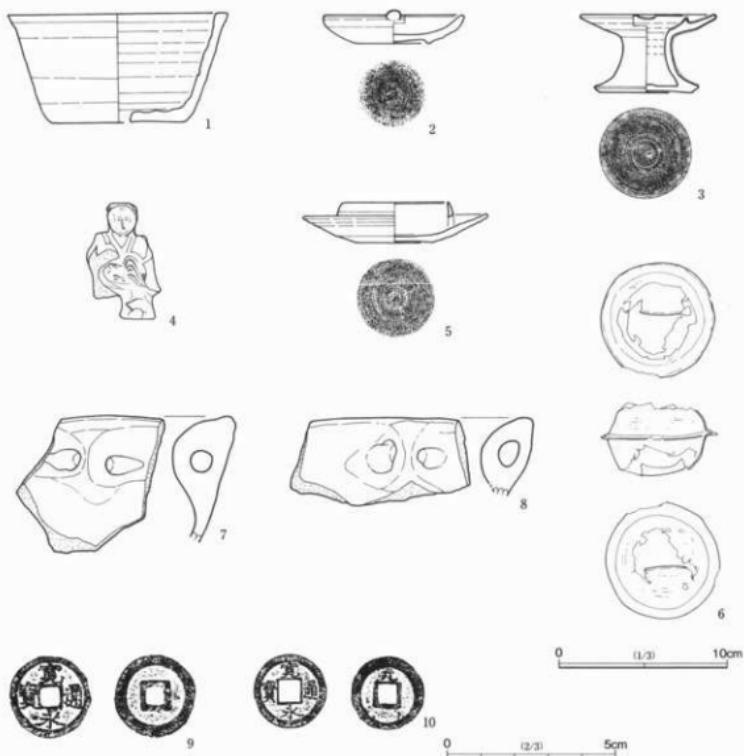
2は塚南側2区盛土上層（3層）から出土した完形の灯明皿である。口径8.0cm、底径4.4cm、器高1.7cmを計る。灰釉が内面から口縁部外面にかかり高台は削り出している。外面下部から底部にかけてススの付着が見られる。瀬戸産で18世紀前半のものである。

3、4は表土下層から出土した遺物である。3は1区出土の有脚付灯明受皿で口径7.9cm、底径5.5cm、器高4.7cmを計る。底部を面取りし底部以外に透明釉がかかる。瀬戸産で幕末のものである。4は1区出土の土製人形である。器高6.9cm、色調は橙色、素焼き中空で型押しによって前半身と後半身を別に造り貼り合わせている。

5～10は表土上層の出土遺物である。5は4区出土の灯明受皿である。全体の3/4が遺存し復元口径11.2cm、底径4.6cm、器高2.4cmを計る。内外面黒褐色を呈し受け台部の対になる位置に周囲の油を流し込むための穴を2か所空けている。器壁が薄く硬い。外面中段にススが付着する。志戸呂産で18世紀前半のものである。6は2区出土の銅鏡である。7、8は4区出土の焙烙である。外面に炭化物の付着が認められる。9は1区、10は2区出土の寛永通宝である。9は背文はない。10は背文が「元」で大阪・高津錢といわれ初鋳年は寛保元年（1716）である。他に小片で掲載できなかつたが磁器片が出土している。



第13図 SM-001



第14図 SM-001 出土遺物

第3章 まとめ

本遺跡は近隣の畠から土師器が表面採集され奈良・平安時代の包蔵地として遺跡台帳に登録されている。今回の発掘調査の結果、縄文時代、弥生時代、江戸時代の人々の生活の営みが確認できた。

縄文時代

縄文時代の遺構は、竪穴1基のみであった。縄文時代のある時期には動物捕獲の場所になっていたことを示すものである。数m北側は松川の河岸の崖面となっており構築位置に注意しておきたい。また、晩期終末土器の出土も注目される。

弥生時代

弥生時代中期から後期に帰属すると思われる住居跡が6軒検出された。検出位置は塚の下部から5軒、調査区東端から1軒である。東端の住居は柱穴2基のみの検出である。また、塚の下部では塚築造時の削平がローム層まで及んでいたため住居跡の遺存状態はきわめて悪く、柱穴4基のみの住居が1軒、住居の大半を失っていて壁と床の一部のみ検出された住居が3軒で、全体がかろうじて検出された住居は1軒である。

今回の調査は東西1.4km、南北0.9kmの広大な文脇遺跡の北端部にトレーナーを入れたことになり、周辺の未調査部分にはかなりの竪穴住居跡が存在することが容易に想定される。これまでの調査事例では遺跡南東部に住居跡と方形周溝墓から構成される密度の濃い遺構分布が知られており、今回の北端調査区まで同様の密度で遺構が展開すると考えると遺跡全体では膨大な数の遺構が埋没していることになり、本遺跡がきわめて大規模な遺跡であることが再確認された意義は大きい。また、今回の調査区は文脇遺跡内でも数m北側が松川の崖面となる緩やかな傾斜地先端部であり、標高は30m前後で35m~40mを計る台地上からは標高的に一段下がった位置に当たる。

銅鏡について

県内では86例の銅鏡が出土している¹⁾。時期の判明しているものではすべて弥生時代後期から古墳時代前期に帰属している。君津地域の出土は13例あり木更津市域7例、袖ヶ浦市域3例である。今回の発見は袖ヶ浦市として4例目となる。ちなみに市内出土内訳は大竹遺跡1点、椿3号墳2点であり竪穴住居と古墳からの出土である。今回の銅鏡は塚盛土中からの出土であり原位置の情報は失われている。しかし形式的には弥生時代後期に属するもので、塚下から検出されたいずれかの住居に帰属していたものと思われる。

文脇遺跡のこれまでの銅製品出土例は小銅鐸1点、銅鏡3点がある。ちなみに県内出土小銅鐸は8点あり、すべて市原市から君津市にかけての西上総地域の出土である。銅鏡は市原市31点を始めとして富津市までの西上総地域の出土が60例確認されている。時代的には弥生時代後期から古墳時代前期に集中している。

今回の発見は袖ヶ浦市域を含む西上総の弥生時代後期から古墳時代前期の金属器文化を考える上で新たな資料を加えることができ、その意味で意義あることと思われる。

近世

調査区一帯は、弥生時代に集落が営まれて以後、古墳時代の土師器が一点検出された以外は近世に塚が築かれるまで人々の生活の営みを見いだすことはできなかった。花和岱塚は周辺の人々からの聞き取りでは塚としての認識はされていたようであるが、すでに信仰あるいは供養の対象ではなくなっていた。

塚から出土した主な遺物は1植木鉢、2灯明皿、3灯明具、4土人形、5灯明受皿、6銅鈴、7焰燈、8寛永通宝である。1は塚南側下部から出土しており、築造時に埋置された可能性が高い。また、2は出土位置から塚頂部直下の南側前面に置かれた可能性がある。3以降は表土からの出土であり築造後の供獻遺物と言えようか。これらのうち、生産年代の明らかなものは18世紀前半と19世紀前半から幕末期の2時期に分かれるが、後者に属する1の植木鉢が盛土最下層の出土であることから塚の築造時期は早くとも19世紀前半の年代とするのが最も妥当と思われる。

塚の築造理由は一般に次の3つが考えられている。1墓所・供養塚として、2祭・信仰の場として、3一里塚などの標識としての塚である。花和岱塚の性格を考える上でもう1つの要素となるのは花和岱塚の立地である。台地縁片部に立地し、数m北は松川の川岸の急崖となる場所である。築いた場所が結果的に川の近くだったという可能性もあるが川に関係する供養という事も考えられる。また、子供の土人形が供えられていた点も考え合わせると子供の水難事故供養なども考えられるかもしれない。

注1 動千葉県文化財センター 1996 「研究紀要17」

写 真 図 版



遺跡周辺航空写真 (1/10,000)



SK - 001



SI - 001 柱穴



SI - 001 柱穴土層断面



SI-002



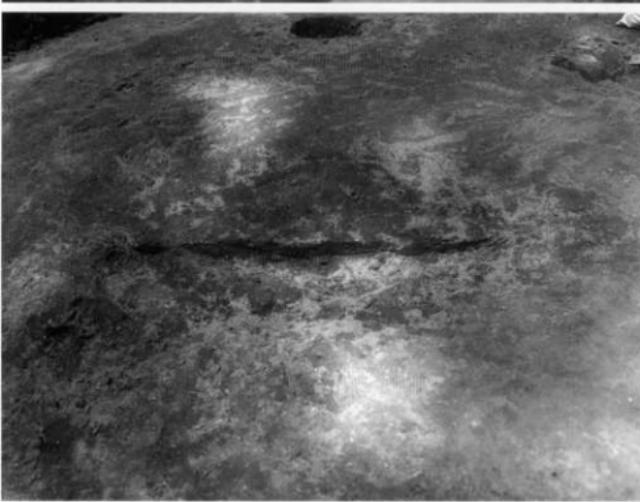
SI-002 土層断面



SI-003



SI-003 土層断面



SI-003 炉土層断面



SI-004



SI-004 柱穴遺物出土状況



SI-005



SI-006



SD-001 土層断面



SM-001 銅鐵出土状況



SM-001 (花和岱塚) 調査前



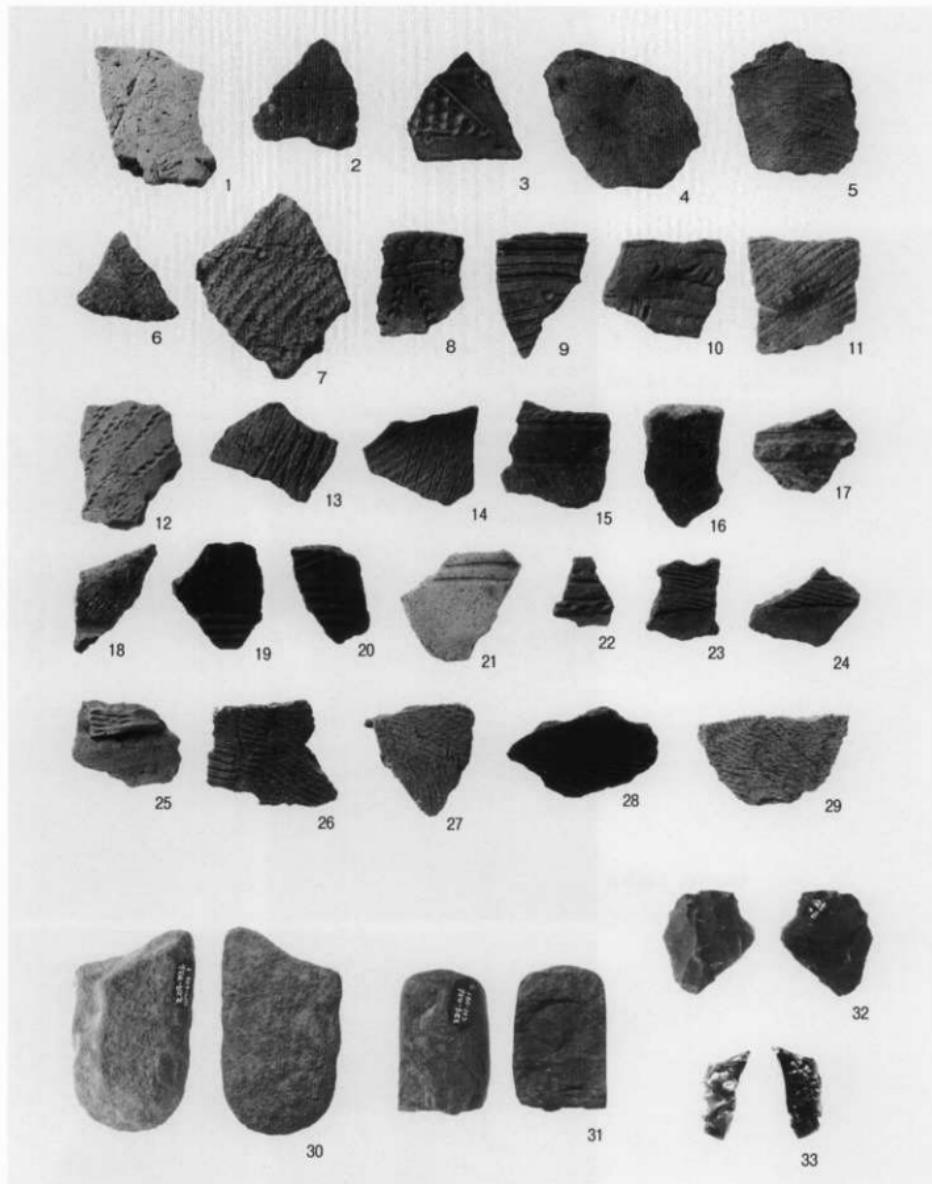
SM-001 表土除去後



SM-001 土層断面



下層グリッド (2C-02)



縄文時代出土遺物



1

2

3

SI-001



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18

SI-002



19



20



21



23

SI-003

SI-004



25



26

SI-005



27

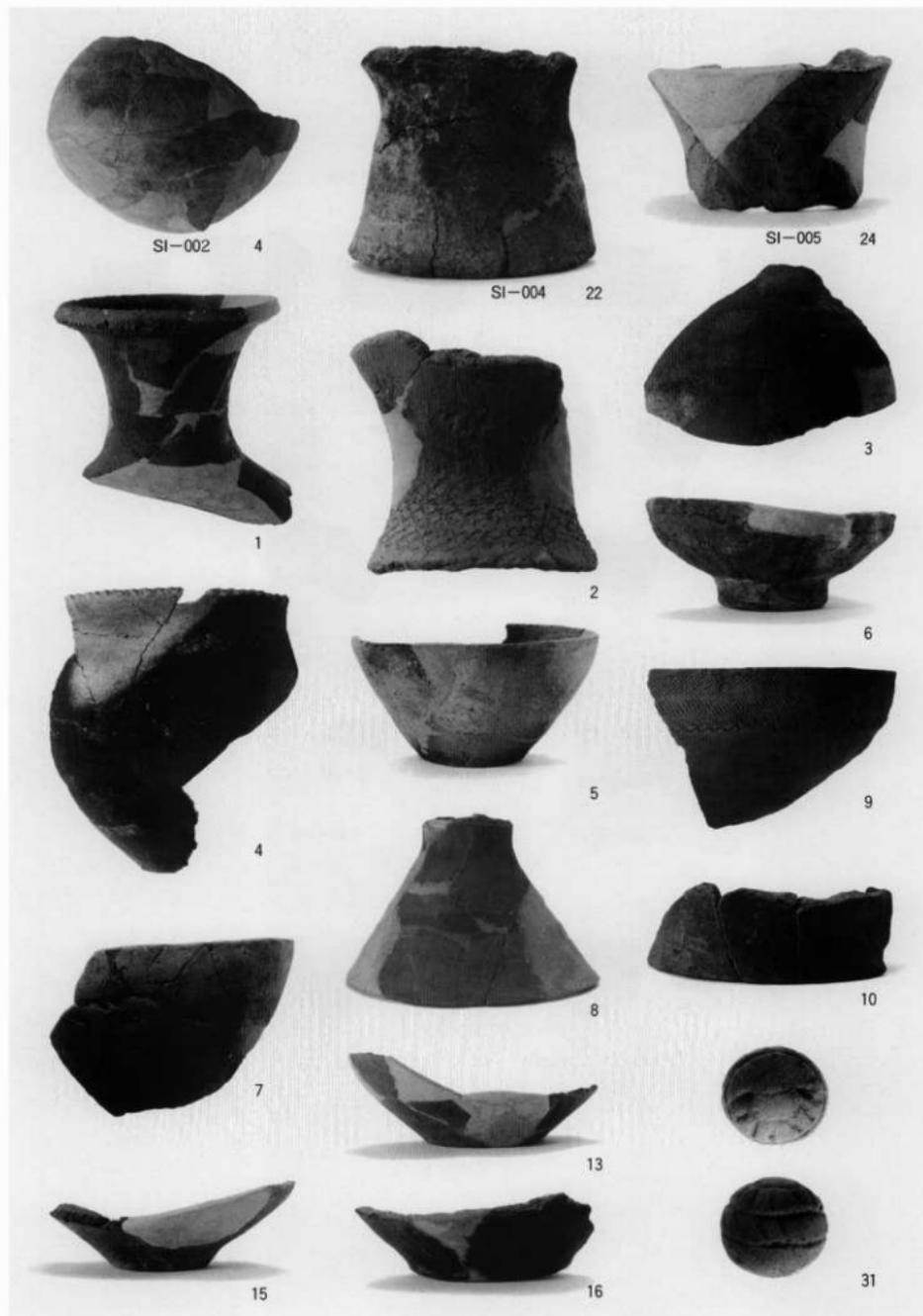
SI-006



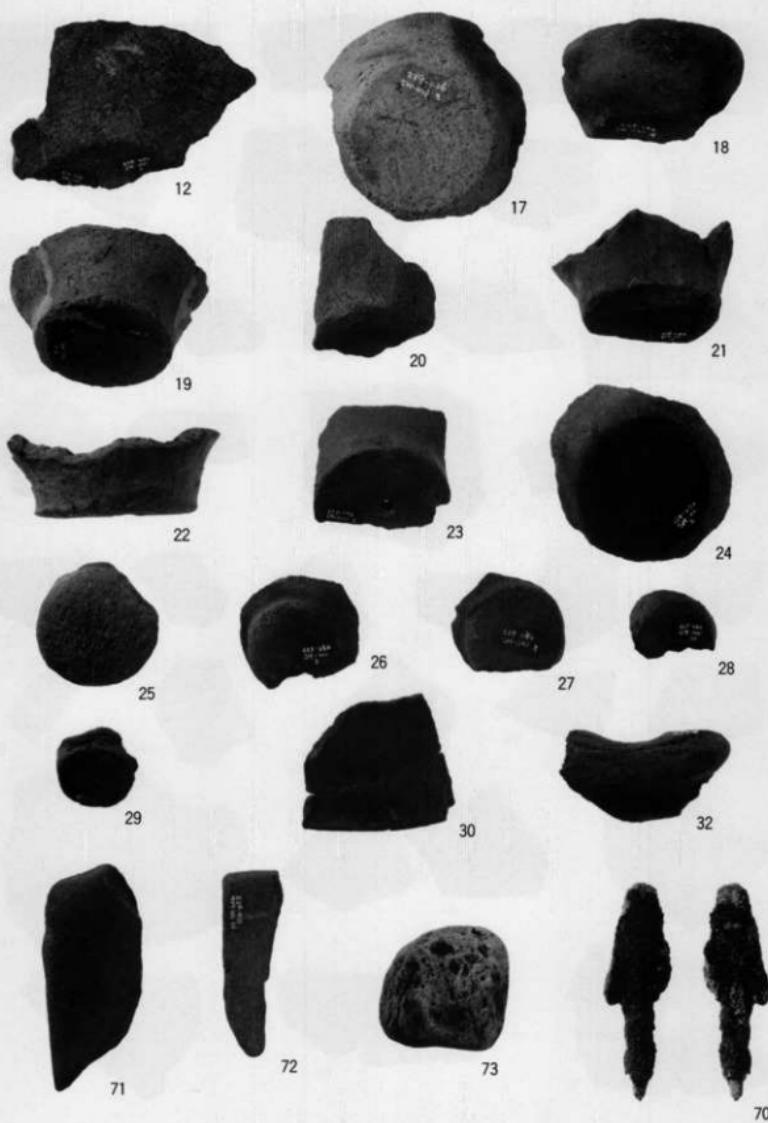
28

SD-001

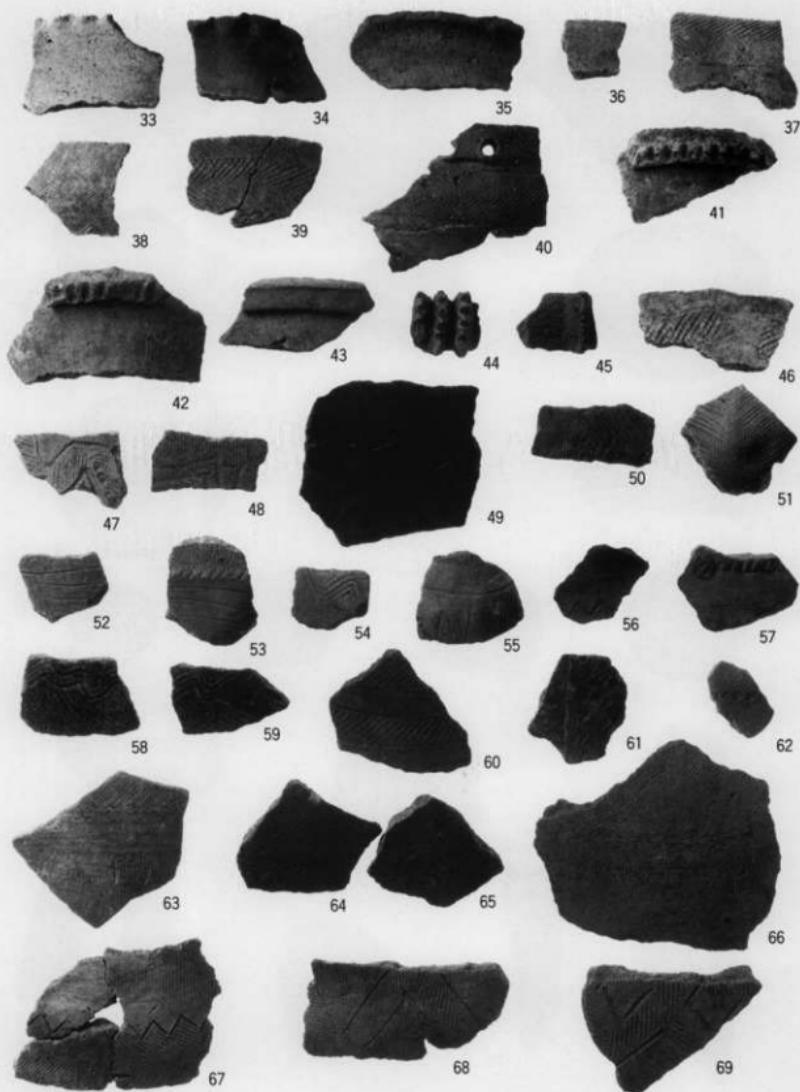
SI・SD 出土遺物



その他の出土遺物(1)



その他の出土遺物(2)



その他の出土遺物(3)



その他の出土遺物(4)



SM-001 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	そでがうらしはなわだいいつか・ふみわきいせき					
書名	袖ヶ浦市花和岱塚・文脇遺跡					
副書名	総合流域防災(松川河川改修)埋蔵文化財調査報告書					
卷次						
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告					
シリーズ番号	第590集					
編著者名	土屋治雄					
編集機関	財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター					
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡 809番地2 Tel 043-424-4848					
発行年月日	西暦 2008年2月29日					
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	經緯度 北緯 東經	調査期間	調査面積	調査原因
文脇遺跡	千葉県袖ヶ浦市上梶 字花和岱759-1他	12229 12229	036 037	35度 40分 08秒	140度 04分 14秒	20070702~ 20070831
花和岱塚						315m ² 塚1基
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
文脇遺跡	縄文時代 集落跡	縄文時代 弥生時代	陥穴 竪穴住居跡6軒 溝	1基 6軒 1条	縄文土器、石斧、剥片 弥生土器、銅鏡、 土製器、砥石、輕石	弥生時代中~後期の密集した集落
花和岱塚	塚	近世	塚	1基	灰輪灯明皿、灯明具、瓦質土器、銅鈴、銭貨	
要約	調査区は文脇遺跡の最北端に位置し松川河岸にあたる。縄文時代の陥穴、弥生時代の竪穴住居跡6軒と溝1条および近世の塚1基が検出された。塚は東西12m、南北9.5m、高さ2mほどで19世紀前半の築造と推定される。文脇遺跡はこれまでの調査例で住居跡や方形周溝墓から構成される密度の濃い遺構分布が知られていたがそれらが北端まで及ぶ事が確認された。					

千葉県教育振興財団調査報告第590集

袖ヶ浦市花和岱塚・文脇遺跡
——総合流域防災（松川河川改修）埋蔵文化財調査報告書——

平成20年2月29日発行

編 集 財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

発 行 千葉県県土整備部
千葉市中央区市場町1-1
財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 株式会社 豊文堂
茂原市早野1143